



2年学年だより

発行日:令和7年 10月31日(金)

発行者:横浜市立南高等学校附属中学校

学校長:二上 直子 NO. 6



南極教室



MINAMI

校長代理 中澤 務

10月16日(木)の6・7校時、本校メインアリーナで国立極地研究所主催の「南極教室」が開催されました。衛星回線を通じて約14,000km離れた南極・昭和基地とつなぐという、大変貴重な機会をいただきました。当日は、現地で活動中の米村さん(附属中学校保護者の方)をはじめ、第66次南極地域観測隊の皆さんとオンラインでお話することができました。

本来は基地の外から中継していただく予定でしたが、当日はブリザードのため、基地内部からの映像が中心となりました。それでも、短時間だけ映し出された風速20mを超える外の様子からは、南極の過酷な自然環境を実感することができ、附属中1、2年生の生徒からも驚きの声が上がっていました。

米村さんからは、観測隊の活動について詳しくご紹介いただきました。第66次南極地域観測隊は、隊員31名、平均年齢40歳(最年少26歳、最高齢63歳)で構成されています。越冬隊長1名のもと、観測部門12名は気象・大気・雪氷・オーロラ・海洋生物など多岐にわたる観測を行い、設営部門18名は機械・建築・通信・医療・調理・環境保全など、基地と人々の生活を支えています。夏隊は約2か月間、越冬隊はおおよそ1年2か月という長期間にわたり南極で活動しているそうです。

また、米村さんからは南極での暮らしにまつわる興味深いお話も伺いました。ブリザードが吹き荒れるときもあれば、静寂の中でクジラの潮吹く音が聞こえることもあることや、危険を伴うクラック(氷の割れ目)のこと、それぞれの基地と交わすグリーティングカードのことなど、南極の生活を実感できるエピソードに、生徒の皆さんは興味をもって耳を傾けていました。生徒から寄せられた多くの質問にも、隊員の皆さんが丁寧に答えてくださり、南極での研究や生活のリアルな一端を知ることができました。

私が印象的だったのは、米村さんが紹介してくださった初代越冬隊長・西堀栄三郎さんの言葉、「とにかくやってみなはれ」です。未知の環境に挑む姿勢は、南極地域観測隊の方だけでなく、どんな学びにも通じるものだと思います。今回の南極教室を通じて、生徒の皆さんには、まだ経験していないことにも勇気をもって挑戦する気持ちを大切にしてほしいと感じました。